

横井小楠の言葉と解説

※ 小楠はあの幕末の時期に民主主義、世界の平和主義の理論をつくりあげていた。

1 「厳正を笑うなかれ」小楠の座右銘

「正義」こそ日本の為と確信している。権力に迎合せず、便乗せず、自ら荊の道を踏破する。全て民のために集約していく。これこそ小楠の小楠たる真髓である。

※ 真理が虚偽によって代々覆い隠されると言うのは、正義ではない。真理に目覚める先駆者はまれである。一般の人間は真理に目覚めない。真理とは、過去においても、現在においても、未来においても正しいことである。正しいことを行うことは真理である。

政事を任せる者、政事を行う者、お互いがお互いに厳正を求める。相互に厳正を指摘し合う姿が、正しい政事のありかたである。民を忘れた政事、政事を忘れた民、此の怠慢が国を亡ぼす。

※ 歴史学者ジョバンニ・ボテロ：「偉大な国家を滅ぼすものは、決して外的要因ではない。それは、なによりも人間の心の中、そして、その繁栄たる社会の風潮によって滅びる。」

※ ギルバート・マリー（英）：「ギリシャ、ローマの大文明衰退の核心は、「気力の喪失」以外に考えられない。

※ 安岡正篤：「国も組織も決して外国の攻撃や環境の激変で崩壊するものでない。すべて内側から崩壊していくものだ。

2 「寵愛は身を滅ぼす」小楠が最も嫌った言葉が「寵愛」

横井小楠は入塾の条件に、「君長を蔑如し、廉節をあやまり、利禄を眷恋し、寵辱に葉せらるる者は、門下に遊ぶことあたはず。」

力量のないものが、上役に媚び諂って出世する。上役も自分にとって都合が良いので引き立てる。下は上からの「寵愛」を得ようと忖度し、他者より抜きん出ようと働く。上は忖度するように臭わせる。上下お互いが私利によって結びつく。政治の大本である「経国済民」に逆行する者たちが、権臣として徒党を組み、入れ替わり立ち代わり権力を振るう。行き着くところ、専制、独裁に行き着く。相互に厳正を指摘し合う重要さはここにある。民（公）を忘れた私利の政治は腐る。民の苦しみがひどくなり、結果、耐えられず反乱、暴動、そして多数の犠牲者がでる。歴史はそう証明している。「寵愛」が、政治腐敗と「民の苦難」の元凶である。

※ 人の語りは天の声、即ち「天声人語」である。声を上げることが放伐につながる。

3 「術数を省いて公明なるべし」

自己至上主義で、要領よくやると出世し要職につける。このような状態では、正道は樹立されず民の不幸は甚大である。政治に携わる役人は、上下に関わらず公明の道を歩くこと。現在の法律では、上司からの違法な命令には従わなくてよいとなっている。それでも圧力があれば、その場を録音、録画し、後々のためにとっておく。下が公明正大であれば、上は違法行為の暴露が怖くて圧力をかけられない。今の世の中それができる。

4 「何でも民のため 国を治むるは民のため 君を立てて政を為す 皆民のため」

小楠の日ごろの口癖である。この言葉に、横井小楠の実学思想、即ち「民主主義」政治の具体的姿がある。民の平和と安全な生活を維持涵養するのが政治だとの宣言文でもある。民が君を立てるのであって、立てた君が「民のため」の役目を果たさなければ民が「放伐」しても構わないことになる。幕末、小楠が自分に言い聞かせるように口ずさみながら、民主主義へ思考をめぐらしていたことがわかる貴重な言葉である。五カ条の御誓文を始め、明治維新の青写真など、この民主思想が重要な役割を果たしている。

5 「天下の治乱に関わらず、一国の独立を以て本と為す」

国内の権力争いで外国の介入を招き、独立を脅かされるような愚かなまねをしてはならない。いかなる時も国が独立して成り立っていくことを最優先に考え、その時、その時に最善の方法を考えていくのが重要だ。これはすべての国についても言えることである。

6 「世の浮雲は、何処にでもかかって心配であるが、そのうちで一番心配なのは、今日の世態である」

内外の重要問題が山積して、政治家が何ら成すところがないから浮雲が日本中にかかっている。一も早く国策を決定して、日本の方途に誤りなきを期さなければならぬ。

- 7 「当世に処するの法は、成否を眼中におかず、唯道を立てて之に向かって邁進する許りだ」
(幕府の) 優柔不断と無能は、そこに道がないからだ。成否を考えず唯道を立てて勇往邁進せよということ。道とは、過去、現代、未来に通ずる人倫の大道であり天地の公道である。
- 8 「生産を盛んにし、租税を薄くして農家を苦しめないこと」
「水は物を濡らす性あるも、溢すれば害をなす。水を治めるは政治の眼目である」
沼山津に転居し、農家の生活が極めて程度が低いのを目の当たりにした。封建大名は、「油と百姓は絞れば絞るほど出る」と考えていたから重税は相当なもので、権力の前に百姓がひれ伏していた。百姓と日夜語るうちに、百姓を苦しめないのには租税を軽くする必要に気づいた。
※ 一生懸命生きている百姓が苦しみ、その上に胡坐をかいているものが安穩としているのは、正しい道ではない。
- 9 「凡ての工業に調和あらしめて、需要と供給との間に統一を取れば、凡ゆる貨物は国内に融通して、万民その利を受ける」
※ 小楠の経済問題についての論策は極めて少ない。経済の専門家ではないが、越前藩での貨幣制度改革確立、手形発行、貿易を始めて藩財政を立て直したところから、進歩的な経済感覚を持っていたと言えよう。
- 10 「道は天地の道なり。我国と外国のという事はない。道のある所は外夷といえども中国（中心に値する国の意）なり。無道に成らば我国支那といえども即ち夷なり。終いに支那と我国とは愚かな国になれり。西洋には大いに劣れり。比べてアメリカなど態々日本のことを熟観いたし、決して無理非道なことはなさず、只日本を諭して漸々に日本を開くのを見たり。猖獗（疫病など悪いものが猛威を振るう事）なるもの皆天下人なり。茲で日本に正義の大道を起さねばならぬ。強国になるではならぬ、強あれば弱あり、此道を明らかにして世界の世話やりにならねばならぬ。一発にて一万も二万も戦死するというような事は必ず止めさせねばならぬ。そこで我が日本は印度になるか、世界第一の仁義の国になるか頓と此の二筋の内、此の外には更はない。」
中国の孟子が梁国の恵王に招かれ、「隣国との関係はどうあるべきでしょうか」と尋ねられた時、「大国は小国に使える気持ち。小国は大国に使える気持ち。」と答えています。まさに仁の心です。自分の主張ばかりのべ他国の立場を理解しないならば、ついには戦争になる。小楠の平和主義と世界一家の思想を端的に表現したものである。天地の公道は、時の権力によって一時曲げられても人間の続く限り人の魂の中に躍動する。和を求める心は人間の遺伝子に組み込まれている。 ※猖獗：コロナの時代、「アマビエ」の横にある文字が猖獗退散。
- 11 「私心を以て万民に君臨するようでは、一旦は盛んなりともその夕には忽ち衰えてしまう。政治は道徳である。それは国を治め、民を安らかにするのが根本である。」
「驕る平家久しからず」、当時の幕府、藩政府の者達には私心があり、私利私欲や又自己の地位を守り、旧習を墨守するのにこれ日も足らざる餓鬼の醜態であった。こんな者が大衆に君臨し号令してもそう永くは続かずやがては滅亡する。
※ 小楠は、政治—道徳—教育を三者一体視していた。
- 12 「人君たる者が天から命じられた職務はなんであるかといへば、天の代わりに万民を治めることである。さすれば、天子は広大無辺にして万民を化育する自然の徳を備えた者でない限り天意に従うことは出来ぬ理である。」
「古堯帝がその子には位を譲らずして、舜を民間から選び出した仕打ちこそ真の大聖たる所以である。迂愚の学者は、此の道理に暗くして禪譲をとにかく沙汰するが、それは聖人の心外とする事だ。嗚呼迂儒の主張する血統論の如きは、どうして天理に順応したものであろうぞ・・・」
「古の聖帝は天下を巡行し、それで天下士民の下情に通じた。常に風雨を犯し山川を跋涉して天下を巡行した。然るに多くの人君は、徒らに宮中深き所に自重して独りよがりの天下大平を気取っているのはいかが。嗚呼天下の禍乱は何処から起こるのか・・・」
賢愚にかかわらず、血統だからと民の上に立つのはおかしい。人君の条件にそぐわないものは当然放伐されてしかるべきである。天下の禍乱を起こすのは君主か民か考えればわかる。
- 13 「政事の根本は人材を生育し、風俗を敦うするにあれば、学校を興すは第一の政治なり」
政事の根本は人材の生育即ち教育にあり、風俗を敦くして（ただして）学校を興すことが政治

の第一であると主張している。その教育は便乗主義でなく、官学を獵官運動と排撃しているから、独自の見識と権力に屈しない固い決意を小楠は持っていた。

※ 政治の根本は教育にあることは誰でも知っている。人材によってのみ政治は興り社会は住みよくなるが、教育が停滞すれば、人材は少なく国家の前途には深憂が絶えない。政治家に正義感と大衆のために死闘する熱情がなく、更に教育に極めて冷淡であるなら日本にとって、また日本の未来にとって最大の不幸である。

※ 官学偏重の通弊

学問を出世の道具と考えているものは官職を得るに都合のよい学校を目指す。これこそ「獵官の学」、即ち私利の学の最たるもので世の中をゆがめる根源である。学閥が官僚を占拠し、閥内の人間を寵愛する。閥外は排撃の対象となる。獵官の学は、紙上、私利の学で、民のためには実際役立たない。民の活力を奪い、世の衰退の元凶となる。

14 「小廉曲謹をもって道德と為し、博覧強記をもって知識と為す。いやしくも事実にあたれば漠然として糊塗す」「博覧強記の者は、一旦危急に処すると何等適切なことができず、漠然としてその場逃れの彌縫 (び ぬい) 策をなすに過ぎない」 ※彌縫策：一時的に取り繕う策

たとえ膨大な知識を持っていようと、日用に役立たなければ紙くず同然である。知識を得るにしても日用にどう役立たせるのか意識しながら心に留め置くことが肝要である。知識をひけらかす(競う)、即ち他人の称賛を期待する学、言い換えれば獵官の学問か、日用に生かす自分の為の学問かで同じ知識でも雲泥の差が生まれる。

小楠の思想に傾倒した森鷗外が「妄想」の中で、当時の西洋かぶれの様子を記している。自然科学の分野では、記憶力や論理的思考にたけた者にとっては、学習・受容することはそれほど困難なことではない。検索に慣れたる勉強力を備えた大学の成績優秀者を欧米に送り出した。その洋行帰りは、希望に輝く顔をして、行李の中から道具を取り出して、何か新しい手品を取り立てて御覧に入れることになっていた。

15 「人の悪心を正すのに吸々として、人心に逆らっては駄目で善心の培養啓発によって悪心の存在無きを期せよ」「教を施すには臨機応変を主とし、章句の末に拘泥せず活用を第一とする」

「一年の計は稲を植へるにあり、百年の計は木を植へるにあり、国家千年の大計は実に人をつくるにあり」とは千古を貫く金言である。一年の計はその時その時に力を尽くすことであり、百年の計は子孫の繁栄を願う事であり、国家千年の計とは、教育の興隆によってもたらされる絶えまない科学の進歩、その恩恵に期待することである。

※ 人類の無限の発展を希求しかつ待望する者は、教育を重要視し一身を粉にして教育の聖業に挺身する。これは世界の歴史の示すとおりである。聖業に当たる者には第一に徳、第二に臨機応変の力、第三に文章力(自分の思いを正しく相手につたえるため)が必要になる。世事から離れた章句の学では、実際の教場で力を発揮できない。夏目漱石が五高十周年記念式典で述べた「教育は国家百年の大計にして、師弟の和熟は育英の大本たり」も同じ意味で、**教育の成果は「師弟の和熟」に支えられたものでなければならない。**

16 「今各国戦争の惨害に生民の不幸聞くに忍びず。故に米国と協力して以て戦争の害を除くべし。平和は天地の公道であるとの根本理念から進んで日本が万国平和四海同胞の実をあぐべきだ。」

「平和が天地の公道」を唱える小楠にとって、戦争は私道、邪道であって極力避けるべきことであった。戦うのが前提の軍隊は、勇んで一戦交えようとする。これこそ匹夫の勇である。愚民はそれを真の勇だと誤解し、はしゃぎたてる。政治がそれを抑えるのか、利用するのかで平和か戦争かへの道が分かれる。一旦開戦にいたれば、国の予算の多くが戦争に費やされ、国が疲弊していくことを読まないといけない。このことは他国も同じである。世界が戦争をせず、世界の民が平和で、安心安全に生活できるように日本が働きかけていくべきだ。

それが、小楠の「万国平和四海同胞」の真髓である。

17 「条約は対等で結ぶべきで外威に恐れて取り結んだ安政条約の如きはこれに背弛している。」

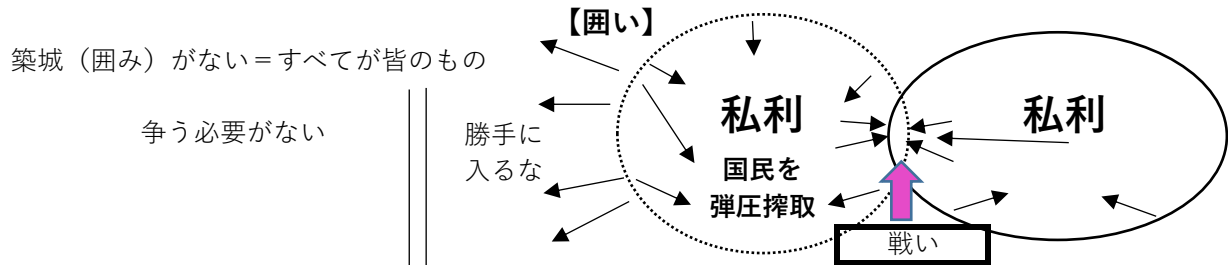
「和と云い戦いと云うも、つまり偏見である。時勢に応じてその宜しきを得るのが真の道理だ。是迄和戦の両主張があったが、既に米国と和親した以上は仕方がないから宜しく講学を以て一致し、外は応対の人物を選び、自然の理をもって外人を心服せしむべきだ。」

「幕府史法儒目前の利害をみて隠循苟安(インジュンジュンアン)、外国の脅迫に苦しみ立つ所を知らず」

長年の友人（熊本藩家老長岡是容）と絶交し生命の危険に曝されても、断じて世界の大勢を究め、日本の将来を憂いて立国の大策を堂々と述べている。

18 「築城は豪族割拠時代の遺物、こんなものは四海一家の国是の障壁になる」

四海一家の国是とは、世界の平和である。この平和を脅かすものは築城である。築城によって自分の領地を主張し、他国との衝突に備えて軍備を整える。誰も信じられない暗黒の戦国時代を生み出した元凶もこの築城である。強大な武力と置き換えてもよい。片方が強くなれば、周りも強兵を目指す。軍備の競争は戦争の第一歩である。国民生活は軍事費の重圧で奴隷的である。小楠は「民貧しくて驕兵なれば、何をもって戦わん」と云っている。北条、足利、織田、豊臣、徳川は支出の80%以上を軍隊に投入した。そのため、民は悲惨な目にあった。



19 「世の中に若し自分を用う者があるならば、先ずその使命を奉じて米国に赴き、米国大統領に会い平和条約を締結し、次いで各国を廻り同様の条約を締結し、世界の戦争を停止する」

小楠は、「各国が勝手な主張のみ述べて、協調の心がなくてはついには戦争になる。苟(ヤシク)も人情を通ずれば戦争はなくなる。各国の政治家にこの見識がなければ百年河清を俟(マ)つの愚で、戦争は絶えない。」と、言っている。

20 「人心の不和と器械の不備をもって戦争しては、百戦百敗は必然である」

「戦争は対等の武器戦力を必要とする、驕兵は強兵にあらず」

小楠の云う器械とは兵器及び科学をいう。優勢な軍隊は機械力や科学兵器を相手より多く持っている。武田信玄が戦国時代の最高の戦略家と呼ばれるのは、信玄の下で善政が行われ領民の生活安定があり信頼を受けていたことと、当時の科学兵器である小銃隊が多く敵を奇襲していたからである。関ヶ原の戦いで、西軍に機銃が1丁あったら家康の天下統一はなっていない可能性もある。乃木軍が旅順の要塞攻撃で、屍山血川の攻撃を繰り返しても相手の機関銃に簡単に一蹴されたが、これも器械の差であった。神国の民、皇軍などはただの呼称であり、精神主義をいくら強要しても器械の差はいかんともしがたいのである。神風特攻隊の敷島隊、大和隊、朝日隊、山桜隊の名称も国学者本居宣長の「敷島の大和心を人問えば、朝日に匂う山桜花」から来ている。幕末の小楠が「国学者の見識は狂っている」との批判がズバリ的中していたことを、後世の歴史が証明したわけである。

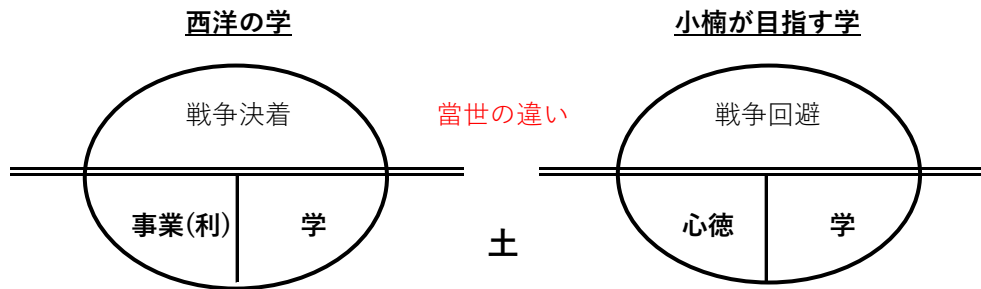
21 「方今五大州の中で、ロシア、イギリス、アメリカが鼎立する関係にある。他の国はいずれかに組み込んでいる」

「日本人であろうと外国人であろうと差別なく皆同じ人類であるから、互いに交通し、交易の大利を通じることが今日自然の理勢と考えられる」

明治維新の「信仰の自由」「賤民を市民へ」は、明治2年の早々行われた会議で確実になったものだが、これは横井小楠の力で実現されたものである。御誓文の「皇紀を振起」するため外国から約5,000人の医学、政治、金融、地理、生物、地震、絵画など多種多彩の専門家が「ザ・ヤトイ」として招かれた。その第一号であるアメリカ人のグリフィスは、賤民を一般市民の地位まで引き上げた横井小楠の偉業を、「リンカーンの偉業に匹敵する」と評価したが、人間尊重の明治維新から、昭和の「鬼畜米英」へどうしたら行き着くのか不思議である。この不思議を解き明かすことで本当の戦争総括と反省がなされ、未来の平和の礎となる。

22 「西洋の学は、唯事業之上の学にて心徳上の学に非ず。故に君子となく小人となく上下となく唯事業上の学なる故に事業は益々開けしなり。其心徳の学無き故に人情に亘る事を知らず。交易談判も事実約束を詰めるまでにて、其詰ると処ついに戦争となる。戦争となりても事実を詰めて又償金和好となる。人情を知らば戦争も停む可き道あるべし。（中略）事実の学にて心徳の学なくしては西洋列国戦

争の止む日なし。心徳の学ありて人情を知らば當世に到りては戦争は止む可なり。」



学問の根本である「心徳の学」を無視し、単に富国強兵のための人材教育を行い、競争の原理の下で「事業の学」を追求する学校教育は、西欧資本主義諸国のように、やがては戦争政策につながると危惧していることが分かる。現在日本はどの道を進もうとしているのか、その先に戦争があるのか、或いは平和があるのか、小楠の思想は今の私たちに鋭く問いかけている。

- 23 「格別見識もなく、従って大策もなく大和魂とやらを振り廻す人々は、外人を以て直ちに無類の禽獣となし、最も甚だしきは初めより之を仇敵視している。天地の景日月の明を以て之を見るならば何と云うことであろう。「(和魂をとえたる) 尊皇攘夷者は無識、無策の者である」「国学者流の見識は狂っている」。「この頑冥固陋が国家蒼生を過らんとすることは痛嘆の限りなき次第だ。」

小楠は、白刃の下に立つ意気をもって即ち捨身の覚悟で叫び、且つ書いたものである。攘夷論の間違ったことを痛撃した記録は多いが、その内の一つである。この他に、「道既に形体なし、心何ぞ拘泥あらん、渾(スベ)て天地に勢に順う」、「外人も又一天の子ではないか。然る以上は之を待つに天地仁義の大道を以てせねばならぬ」等がある。海外事情を知る努力もせず、ただ攘夷、攘夷と叫ぶ者たちへの憤りが感じられる。

- 24 「堯舜孔子の道を明らかにし西洋器械の術をつくす、何ぞ富国に止まらん、何ぞ強兵に止まらん、大義を四海に布かんのみ。心に逆らうこと有れども人をとがむるなかれ、とがむれば徳を損ず。為さんと欲するところ有れども心を正すること勿れ、心を正すれば事を破る。君子の道は身を修るにあり。」

臨機応変、広大無辺の小楠の政治観、世界観をこの詩文に凝縮した。この詩の中には、中国と西洋に学ぶことを表現しているが、日本についての表現がない。そのため、日本の国体を転覆する意図を持っているとデマを飛ばされた。当時、将軍、大名、又は士族でも代々世襲であって、馬鹿でも将軍の長男は将軍になれていた。国学、神道は万葉集と古事記に執着し、大和の純粋性に拘泥するあまり外国を日本を汚す仇のように見ていた。日本書紀は古事記の復刻改訂版的なもので日本史では二つ合わせて「記紀」と呼ばれる。だが日本書紀は名が挙がらない。なぜなら天皇を語る時、一番大切な天皇の系図一巻がないという欠陥書で使えないのである。

小楠は、堯舜禹三代にわたる権力の禅譲（自分の血筋でなく、人格力量を共に備えた部下に皇位を渡した）を最も善とし、日本の代々の世襲制を否定した。また進んだ西洋の科学技術を学ぶことで、あくまで神国にこだわる旧習の固陋に活をいれようとした。日本の現状への不満、そしてそれを打破し、世界に打って出ようとする横井小楠の決意の雄たけびを感じさせる詩である。この檄文を持って、二人の甥（横井左平太、大平）は密航でアメリカに渡った。

- 25 横井小楠の弟子福井藩主松平春嶽：「自分は辱けなくも幕府の親藩たる貴き身分でありながら夢のように、三十年の歳月を空過したのは恥かしい。併し今よりは君（小楠先生）の輔導の力を頂き、我行を磨き修養研鑽につとめ、決して徒に酔生夢死の人となるまい」

春嶽は御三卿（一橋、田安、清水）の田安家から、福井藩に養子に入り藩主となった。時代の流れによっては将軍になる可能性も持っていた。その春嶽が、これほど低頭して小楠を福井藩に招き自分も弟子入りするという。肥後熊本藩では、変わり者、日陰者の小楠であったが春嶽は小楠の偉大な資質を見抜いていた。薩摩の芋づる、肥後の引き倒しの言葉があるが、折角の逸材を熊本藩は福井藩に持っていかれたのである。そのことは熊本藩にとっては大きな損失であったろうが、日本にとっては大きな利益であった。

- 26 「近年主要な欧米諸国で親交されるようになった天主教は、天文の頃渡来した切支丹とは雲泥の相違があり、天意に基づき、上は国王から下は庶民に至るまで其の戒律を守り、政教一途の政治が行

われ、生きた宗教となっている。また、その学問は經義を明かにするのを第一とし、合せて法律を明弁し、歴史、万国の国情、物産を究め、更に天文・地理・航海術から器械術にいたるまでの天地の間の知識を考究することを使命としている。」 (1856年 村田巳三郎宛書簡)

天文年間 (1532～1555 織田信長1532生、豊臣秀吉1537生)

ヨーロッパでは16世紀初頭に宗教改革が始まっている。教皇が豪商に“罪が許された証拠となる免罪符”販売を許可するなど権威と形式主義となっていたカトリックへの猛批判が起こった。小楠がいう近年の天主教は、ルターらによる宗教改革後のキリスト教の在り方を示している。

- 27 「キリスト教に基づいた政治は、一応民政の安定という「仁の用」を実現できたが、それは畢竟、『割拠見』の気風を抱き、自利するの心底に基づいているために、天を以て心とし、至公至平の天理に則ることがなく、利害の終始を見て、不仁不義の行いが結局は損を招くことを悟って、暴虐なことを慎んでいるだけのことであり、要するに洋人倫理は、未があって本がない霸道で、このような思想に基づく国際関係は偽装され利害と力の場でしかなく、戦争が終わることがない。」

洋人は、表面上は道理を得たような、もっともらしい言動をとるが、根底に自利する心があるため、裏ではもっともらしく偽装された奸計を弄して自利の目的達成を図ろうとする。利に発する世界の行き着くところは戦争である。国際平和の根本は心であり、仁・徳・義を世界が広がれば、おのずと万国平和四海皆同朋の世界がおとずれる。それが、横井小楠の世界平和観である。この考えから世の中を見直して、日本が徳川一家のための私利の政治であることに気づき、「公利」の政治にしなければならないという考えに小楠が行き着くのは、ごく自然なことである。そして、そのように動いた。

- 27 「学問が進むか進まないかは、人のために学ぶと己が為に学ぶとの違いに在る」
「須らく古今に通じ、大義を明らかにし、活見を開きて、これを世務に施す」
「良心を拡充して、日用事物の上に功を用いるのであれば、すべて学問でないものは無い。後世の学者は日用の上での学問に覚めず、ただ書物について理解するだけである。所謂古人の奴隷にすぎない」

自分で学び、自分で考え、自分の胸にすくと落ちるようでないと本当の学問は身につかない。書物に書かれている文字は、この世の森羅万象のごく表層を表現しているに過ぎない。書物の知識はあくまで「古人の知恵の成果」である。それから何を学んだかが重要で、どれだけ記憶したかは真の学問ではない。世の中にはもって生まれた強記の能力がありながら、知識を自慢し見せびらかすだけに止まり、実用に活かせない者が多いのは誠にもったいないことである。

- 28 読書論：「まず第一にわが心也。心を持って読書すれば「格物」（本質）も見え、知識も章句ごとに広がるが、「空心」で何十年読書したとしても何の益もない。」
「今読書が、致知も力行も人のためにする中は、学問が好きになったり自分のものにしようとする欲も出てこない。」

自分がどれだけ物知りか、どれだけ読書をしているか見せびらかすようでは、自分を他人がどう評価しているかに気を取られていることになる。即ち自分の中にどれほど血や肉になったのかという内面を見つめることに気が向いていない。まず、自分に力を貯えることが先である。自分の内に真理と正義の確信を持つためには、他人のためにでなく、まず自分のためである。それで、読書も日用に生きる学問となる。

- 29 「命を奉ず孤臣千里の身、青山海碧一望の春、此の行唯心事を盡さんと欲す、成否は天に在りて人に在らず」

福井藩から招聘され、如何に小楠が雀躍したことか、その姿が目には浮かぶようである。春嶽という名君の恩寵を受け、命を懸けてその恩に報いようとする純粋な気持ちとみなぎる気迫を感じさせる。橋本左内ら若手を登用し藩政改革に取り組んでいた春嶽にとって、小楠への期待の大きさもこの詩から推察される。

- 30 「有道の国は通信を許し、無道の国は拒絶するの二つ也。有道無道を分かつ一切拒絶するは天地公共の理に暗して、遂に信義を万国に失ふに至るもの必然の理也。」

1853年、ロシアのプチャーチン使節として長崎に来る予定の友人で幕府勘定奉行・海防掛である川路聖謨のために書いた「夷虜応接大意」であるが、この頃すでに「万国に共通する道」が存在すると捉え、世界にとっての「公共」という考えを持っていた。「攘夷、攘夷！」を叫

ぶ国内の尊皇攘夷者、純粋性を声高に叫ぶ神道者、国学者たちを明確に天地公共の理に暗いと断じている。小楠の考えは、それらの人々にとって到底理解の及ぶものではなかったろう。

31 「京師にて日本政府相立ち、上院・下院人材相集め、諸事議定の趣向にて、今より兩三年にはどうなりと落着、安堵の地に至り申すべく候。」(1868.2 米国の二姪へ)

一カ月前、明治新政府から出仕要請の通知が小楠の元へ届いた。新国家の体制づくりが始まる喜びをアメリカにいる二人の甥に知らせた。この時すでに小楠の頭には、三年間で新政府の体制を固める構想が出来上がっていたことを示すものである。小楠の指導で体制づくりが始まると、それを嫌い危機感を覚えた陰陋から1年後暗殺される。小楠が目指すアメリカの民主主義が、数カ月後には1, 200年も前の律令制へ後戻りすることになった。誠に残念なことである。日本にとって計り知れない歴史的な大損失であった。横井小楠があと2年生きて政治体制を確固としたものにしていたら、日本人が経験した悲惨な戦争は起こらなかった。陰陋とは考えが狭く、それにこだわり、幅広い考えを否定し、我を通す。只々権力のためである。困ったことに権力に媚び、忖度して生きる者達がいる。誠に始末に悪い。民は日ごろから世の中をよく見、陰陋の動きを見張らなくてはならない。関係ないでは日本版プーチンを生み出す。

32 横井小楠の実学思想の集大成、「五カ条の御誓文」

前もって、「五カ条の御誓文」という固有名詞の付く文書はないことを確認しておきたい。現在の教科書は「五カ条の誓文」で、「御」がない。「御」があると「誓う主体」が人間の天皇で、相手は神となる。民主主義を目指す国家として自然である。天皇は当時神でなかったことを証明する。また、御を外し「誓文」にすると、天皇が自分自身に誓った(言いきかせた)だけで、他に向かって誓ったものでない。ゆえに他から干渉される筋合いのものではないともとれる。国民に誓ったものでないことは確かである。「御」一字だが、とてもきな臭いにおいがするのである。私たちが知りたいのは、五カ条が書かれている文書の題：「正式名称」。創作はいらない。

五カ条の御誓文の草案「議事の体の大意」は、福井藩における俊秀の弟子由利公正の作であるが、最終的な御誓文には小楠が日ごろ使っていた「常套熟語」が沢山使われている。

○広く会議 ○(万機)公論 ○上下の情 ○心を一つ ○経綸 ○庶民 ○人心をしてうとまざらしめん ○旧来の陋習 ○天地の公道 ○知識を世界に

これらは横井小楠の専売特許のようなものである。議事の体の大意から御誓文への過程において、小楠が深くかかわっていた証明でもある。維新当初から横井小楠は参与に任命されており、御誓文にも関わることができる状態にあった。ただ熊本藩の反対で京都出仕が5カ月遅れただけである。その経緯は次のとおりである。(再掲)

維新政府参与への経緯

- 1867.11.9 大政奉還 1867.12 小楠「新政に付して春嶽に建言」を提出⇒弟子の春嶽公が新政府の議定に就任することを知っていたことになる。
- 1868.1.2 春嶽が議定に(小楠への就任要請到着の日付1/12。当初から就任は決まっていた。)
- 1868.1.3 王政復古の号令 政府にとって一刻を争う事態なのに熊本藩の反対で出仕が進まない
- 1868.1.12 小楠に出仕せよとの通知届く 御誓文検討修正も「手紙」-----じれったさに岩倉怒る 熊本藩(韶邦)
- 1868.4.6 [五カ条の御誓文]---「実現の具体策」見えず 小楠の土籍復活
- 1868.4.30 小楠、藩船凌雲丸で百貫港から出る
- 1868.5.14 徴士参与を命じられる 1868.5.25 参与として入京 政体書(閏4.21)
- 1868.6.2 (閏4.9) 制度局判事となる (1868.6.11)
- 1869.2.14 朝廷の会議の席上、小楠は「信仰の自由」と「賤民の市民への地位向上」を確実にした。前日の会議から24時間の経たないうちに暗殺される。事の経緯から実行犯を操った真犯人は、長州と朝廷内の固陋貴族だとほぼ断定できる。
- 2.15

西暦に替わって150年。未だに太陰暦と太陽暦の照合を必要とする。愚か極まりない。神や英雄に惑わされる日本史から、筋の通った学びやすい民のための日本史・世界史にしなければならない。

元号を使わず、太陽暦にするだけですむこと。歴史学習の基礎準備!